
愚者のダンス

深水晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愚者のダンス

【Nコード】

N9934B

【作者名】

深水晶

【あらすじ】

R15・グロテスクで残酷な暴力描写アリ「判ってるんだろう？」お決まりの台詞で始まるエンドレスな殺戮遊戯。狂いたくても狂えない。「悪夢の夜希望の夜明け」のアナザーサイド・ストーリー。気弱な男が狂氣的で残酷な殺人者になるまでの物語。

第一話 始まり（前書き）

グロテスクで残虐な暴力描写があります。
苦手な方はご注意ください。

第一話 始まり

俺は彼女を何度も殺す。殺す間は俺を見てくれるから。これが夢か現実か既に区別がつかない。

飛び散る血しぶき、甲高い悲鳴。

肉を裂き貫く感触。

ほら見ろ、彼女の白い肌には赤が似合う。

ズブズブと白い肌に、赤く染まったナイフが沈み込んでいく様は、ひどくエロティックだ。

スイッチが切り替わるように、ナイフを握ると高揚する。

いつもの意気地なしで言いたい事が言えない根性なしの偽善者が姿を潜ます。

アドレナリンが分泌され、俺の全身を満たしていく。

月の光を全身に浴びて、俺は全知全能の神になる。

俺は繰り返して呟く。

俺は不死身だ、全知全能だ、誰にも何にも邪魔されない、何をしても許される、俺は神だ。

神なんだ。でなければ狂人だ。

じゃなきゃただの殺人者に、薄汚い犯罪者になってしまいうじゃないか。

どうせこれは夢だ。何をやってもリセットされる。

殺しても、殺しても、殺しても、誰にも何にも、邪魔されない。

殺すだけ殺したら、睡眠剤を大量に飲んで眠ろう。

そうすれば、もう一度最初から始められる。

普段の君は、俺を見てはくれない。

普段の君は、俺の声に気付かない。

普段の君は、俺を感じてくれない。

だけど俺が刺している時の君は、俺を正面から見つめて感じてくれる。

ナイフを刺す度に、震え、悲鳴を上げ、身をよじらせ、涙を流す。
ああ。

いつから俺はこの夢を見ているのだろう。

夢の中だから何でもできる。

俺は最強だ。

君を支配する神にもなれる。

だけど、何処か心が軋み、たわみ、悲鳴を上げる。

お前は狂人になりたいのかと。

お前は彼女を愛していた筈ではなかったかのかと。

……うるさい。

彼女の声が聞こえない。

俺は酔いたいんだ。

彼女の絶望と悲鳴をBGMに。

ああ、けど何故こうなってしまったんだろう。

俺はただ、彼女に触れたかっただけなのに。

彼女の声が聞きたかっただけなのに。

彼女がビクンビクンと震えて、痙攣し始め、ナイフを刺しても呻

き声しか上げなくなった。

俺はジッパーを引き下ろして中身を取り出し、彼女の中に挿入する。

彼女の中は温かい。

無反応な彼女を貫き、擦り、突き上げる。

ああ、瞳孔が開いてるよ。

そんなに気持ち良いのかい？

俺は君を愛している。

この瞬間は至福だ。

最高に幸せて気持ちが良い。

だけど耳の奥で声がする。

やめろ、やめろ、お前は狂人になるつもりなのか。

歯止めの利かないケダモノになる気なのか。

そんなことは許されない。
誰も何も許してくれない。

お前は矜持も誇りも信念も、全てかなぐり捨てて、狂った愚者になりさがる気か。

うるさい。

うるさい。

うるさいんだよ。

俺はもっと心地よい音楽を聞きたい。

彼女の悲鳴は最高だ。

もっと聞きたい。

ああ、残念だ。

ナイフを突き立てても、悲鳴を上げてくれない。

とても残念だ。

動かない彼女の髪をそつと撫でる。

絹糸のように細くしなやかでなめらかな美しい髪は、血と汗にまみれ汚れ乱れている。

彼女の髪に口づけてから、彼女の唇にそつと触れた。

キスするのはまた今度にしよう。

一度にするのはもったいない。

君も喜んでくれるよね。

俺の、高慢で我儘な女神。

俺は、ナイフを掲げて踊る。

愚者のダンスを。

中学生の時の事だ。

「とおきおきの良いこと教えてやるよ、隆史^{たかし}」

母の弟の春臣^{はるおみ}さん——俺より七歳年上で、叔父さんと呼ぶと怒られる——が、笑って言った。

「人生ってのはな、自分以外は全員他人だって知ることだ。でもっ

て、そうと知った上で相手と信頼関係築くのが、処世術。けどな、そう難しい事でもないんだぜ」

春臣さんは悪戯っぽく笑った。

「覚悟と心構えと信頼。生きていくのに必要なのはこれだけだ。おい、隆史。俺、すげえ良いこと言っただろう」

「判んないよ、それ」

俺はそう言った。

「あゝ、隆史にはまだ早すぎたか。今は判らなくて良いや。ま、その内な」

そう言った彼は、俺が大学を卒業し社会人になった年に、交通事故で死んだ。

だが、労災みたいな死に方だった。

長距離トラック運転手だった彼は、超過勤務と過密スケジュールのために無理をして、睡眠不足のまま走っていた。

その彼がセンターラインを割ってぶつかり横転させたバスは、慰安旅行中だったというのは、あまりにもシニカルな事実だった。

俺は春臣さんが気の毒で、その観光バスを恨んだ。

だけど、その被害者の中に、小中高校時代の想い人であり初恋だった永池真理ながいけまりがいたのは、衝撃だった。

彼女は俺の青春時代唯一の煌めき、夜空に輝く星だったから。

とは言え、彼女とどうこうしたわけじゃない。

俺は最初から最後まで片想いで、挨拶くらいしかできなかった。

彼女はいつも完璧な笑顔で応えてくれて、それだけで俺は嬉しかった。

彼女は高校一年生の時に、野球部のマネージャーになり、俺はそれほど野球に興味あるわけじゃないのに入部した。

それほど熱心ではなく才能もなかった俺は補欠にもなれない雑用係。

だけど、その方が彼女との接点も多くて、幸せだった。

彼女は気が強くて美人で、しっかりてきぱきしていて、言いたい

事をはっきり言うタイプだった。

だけどそれでいてこまやかで優しく、世話焼きで。

たぶんほとんどの部員のアイドルだったと思う。

暗黙の了解で、好意を持っていたても、彼女を口説いたりするやつは一人を除いていなかった。

袋叩きにされるか、闇討ちされるか。

そういう雰囲気だった。

空気を読まない、でなければ最初から気にしない、バカと紙一重のつわもの、そいつの名は、工藤直哉くどうなおやといった。

中学の頃からピッチャーで、速球とカーブが得意なスポーツ推薦入学生。

尊大で傲慢で

「俺がこの部に入っただけには、甲子園は確実だ。まかせろ」などと入部時の自己紹介で言ってしまうような、そういう男だ。

初めて会った時から嫌いだった。

背が高く、肩や上腕の筋肉がしっかりしていて、首も太い。

そのくせ顔は女にモテそうなイケメンで、足はしなやかで長い。

若干身体全体のバランスからして、腕が心持ち長めだったが、それほど遜色はない。

頭はバカだ。

口が悪い。

性格も悪い。

大言壮語を吐き、尊大な口調で生意気で。

自信に満ち溢れているその姿を見ると、吐き気がした。

だけど、俺は気弱な意気地なしで、世間の目が恐い小心者だ。

無難に当たり障りなく振る舞った。

決して近付きたいタイプではなかった。

なのに、そんな工藤の口説きに永池が落ちて付き合い始めたとき、煌めく星だった彼女の光が、陰って見えた。

君も普通の女だったのか——そう思うと、気持ちちは冷めた。

なんだかどうでも良くなった。

彼女は女神ではなくなった。

だけど、俺は夢想上のセックスの相手に、いつも彼女を選んだ。夢の中で彼女にひわいな言葉を浴びせ、罵倒し、凌辱する。

彼女はひどく乱れて、嫌だと言いながら悦び、自ら細腰を振る。そんな幻想に酔った。

だけど、ここ暫くは忘れていた。

彼女が死んだ。

そう思うと、涙が溢れた。

叔父の春臣さんの死は悲しかった。

だけど、彼女の死は、俺の心の一部の喪失だった。

死なせたくない。

既に死んでしまった彼女のことを思う。

彼女を守りたい、救いたい、助けたい。

彼女に愛していると伝えたい。

俺は彼女の死んだ場所へ向かった。

そして俺は、神に、あるいは悪魔に祈る。

もう一度、やり直しさせてください。

俺は死んでも良いから、彼女を。

不幸になっても良い。

傷付けられても良い。

俺は祈った。

その時だった。

トラックがセンターラインを割って、目の前に突っ込んで来る。

束の間、運転手と目が合った。

……春臣さん。

俺は乗っていた乗用車ごと宙を舞い、天井から地面に落下する。

記憶はそれで途切れた。

「だからさ、隆史」

目の前には春臣さんがいる。

「今は難しいこと考えずに夢を見ろ。意味や理由なんて考えなくたって良い。そんなのは無意味だ。人生楽しめ。青春は過ぎ去れば一瞬だ」

春臣さんは快活に笑う。

ポロリ、と涙が落ちた。

「どうした？ 隆史」

不思議そうに、春臣さんは言った。

「……夢を」

そう。

あれは夢だ。

「悲しい夢を見たんだ」

すると、春臣さんは苦笑しながら言った。

「ただの夢だ」

そう言って、頭を撫でてくれる。

「気にするな」

俺は頷いた。

第一話 始まり（後書き）

のっけからヤバイ話なので、R18にするか封印するか迷いましたが、一応公開で。

問題ありましたら、削除・非公開にします。

精神的にかなりイッてるアレげな人は、現実にはあまりお近づきになりたいとは思いませんが、小説的には、色々膨らみます。

一度真面目に狂人あるいはそれに近い心理描写を書いてみたかったので今回書く事にしました。

気分悪くされたら申し訳ありません。

普段、この手のキャラは脇役に回してしまうので、どうだろうかと思いつつ。

ただ、こういう話を書くとき、時折、そういう中身の人かと思われる事があるので困ります。

とりあえず経験のない事でも、資料と素材があればなんとか書けるだろう、と私は思うのですが。

そこにリアリティを感じられるかどうか、腕のふるいどころで難点だと思います。

殺人を犯した人の告白本や心理について書かれた本などを読んでみると、家族の視線が色々痛いですが。

時折「いつか織田信長を理解するために必要なんだよ（嘘）」という事しておくべきか、ノーコメントとすべきか、悩みます。

小説書く時に良くやるのは、物事をすりかえて考えて想像する事です。

例えば天敵である○キブリに対する憎しみや苛立ちをぶつけてみるとか。

クラッシュしたHDD内に保存されていた、バックアップなしの復

旧できないデータへの愛着や執着・後悔について考えてみるとか。
発熱で一週間近く寝込んで、食欲も激減して朦朧としている時に、
死について考えてみるとか。
そういう感じです。
たぶんアホですが。

第二話 挫折と希望

あれは夢だ。

全部夢なんだ。

そう考えようとした。

だけど、それからおかしかった。

周りの人のすることや、物事が、ほとんど記憶通りに再現されるのだ。

時折異なる事もあった。だけど、大筋では変わらない。

高校へ進学して、野球部に入って、工藤を見た時、ハッとした。

このままでは、同じ事の繰り返しになる。

だから、俺は彼女に、永池真理に告白した。

だけどその答えは、

「ごめんなさい」

即答だった。

「私、あなたのことが良く知らないから」

嘘だ。

小学校、中学校も同じだった。

クラスは一度も同じにならなかったけど、同じ美化委員や保険委員で一緒に仕事したこともあった。

俺は君を見かける度に挨拶や会釈して、君もそれに応えてくれたのに。

なのに、記憶に残っていないというのか。

「俺の顔、覚えているよね？ 名前くらいは記憶にあるよね」

彼女は困ったように首を左右に振った。

俺は暫く何も言えなかった。

「ごめんなさい」

彼女は頭を下げた。

知らないというのなら、工藤の方が、君を知らないし、君も知ら

なかった筈だ。

つまり、俺は問題外っていう事だな。

視界に入っても見えていない、耳に入っても聞こえていない。俺はそこにいてもいなくても変わらない。

どうでもいい。

ある意味、完全無視されるより痛いじゃないか。

空気より軽い存在。

俺はここにいるのに。

俺はずっと君を見てきたのに。

俺は舞台にも上がれない観客なのか？

苦しい。

辛い。

消えたい。

何もかもなかった事にしたい。

俺の存在ごと、世界を消したい。

俺は自惚れていたのか？

俺は傲慢だったのか？

好きだと言って貰えるなんて期待していなかった。

愛されたいなんて思ってたかった。

だけど、存在すら認知されてなかったってどういう事だ？

アピールしなくちゃならなかったのか。

次の日、工藤と永池が付き合う事になったと聞いた時、愕然とした。

俺と工藤の何が違う？

顔・容姿か、性格か？

野球ができるからなのか？

少なくとも、知ってる・知らないは関係ないよな。

ってことは、あのフリ言葉には、さして深い意味はないってことか？

だって、永池、君は工藤のこと、俺ほどにも知らないだろう。

ただの言い訳だ。

適当な理由、詭弁だ。

興味ないから、どうでもいいから、好みじゃないから——そう言
って突き離された方が余程マシだ。

かえって、残酷だ。

彼女のことは忘れよう。

忘れてしまおう。

彼女は俺の告白なんてなかったみたいにな、変わらぬ笑みで声をか
けてくれる。

俺は二度と増長しない。

自惚れない。

だけど痛い。

痛いんだ。

いっそ部をやめてしまおうかと思った。

だけどやめられなかった。

意味なんてないのに。

もう理由すらないのに。

彼女は俺を見ない。

見ても見えていない。

彼女は俺の声を、言葉を聞かない。

聞いてはいるものの、耳を素通りする。

工藤の何が良いんだ。

顔と口だけじゃないか。

意外と努力家ではある。

だが、大言壮語のわりにはたいした事がない。

俺はそれ以下だと言われたら、その通りだけど。

少なくとも、彼女にふさわしい男だとは思えない。

彼女が俺を見ないなら、俺も彼女を見なければ良い。

彼女が俺の声を聞かないなら、俺も彼女の声を聞かなければ良い。なのに、目が、耳が、全神経が彼女を追ってしまう。だけど彼女は、このままだと死ぬのだ。

人間は生まれた瞬間から、後に死ぬと決まっている。死なない人間はいない。

いたら化物だ。

人間じゃない。

おおよそ予定通りの、俺の記憶に近い状況の現在が進行していく。死んでも良いじゃないか。

どうせ俺のものにはならない。

どうせ俺は問題外だ。

だけど春臣さんの死だけは、何とかしたい。

俺は春臣さんに何度も言って転職させた。

春臣さんは、ガソリンスタンドの店員になった。

これで春臣さんが死ぬ事はない。

俺は安心した。

……だけど。

「……なんで」

春臣さんは死ななかった。代わりに見知らぬ名の男が死んだ。

それは良い。いや、良くないかもしれないが、俺の知ったことじゃない。

問題なのは、永池真理が、重症を負ったという事だ。

見舞いに行くべきか否か、悩んだ。

だけど結局行かなかった。

数ヶ月後、永池は、駅のホームから飛び込み自殺した。

それを知った時、激しく後悔した。

永池の通夜に行った。

そこで、永池が半身不随になったこと、それを苦に病んで自殺してしまった事などを知った。

工藤は憔悴していた。赤い充血した目で、あらぬ方を見つめてい

た。

俺は泣かなかった。だけど、哀しみ、後悔していた。

皆が判りやすい工藤に、慰めの言葉をかけるのを、少し離れたところから見ている。

工藤は心ここにあらずといった様子だった。

俺はそんな工藤を観察しながら考えた。

こいつは、永池真理が事故に遭うという事を知らなかったんだ。そして永池が死ぬという未来を知らなかった。

全く知らなかったんだ。

だけど、俺は知っていた。

俺は、工藤よりも良く彼女を、彼女の未来を知っていた。

優越感を覚えた。

俺は唇がゆるんでいくのが判った。

次は、彼女を助けよう。そうすれば、彼女は俺に感謝する筈だ。

工藤は役立たずだ。

俺には彼女を救える。

春臣さんの命を救ったように、彼女の命を救える筈だ。

第三話 観察者

事故が起こる日付、時刻は判っている。

彼女の勤め先も判っている。

簡単な筈だった。なのに、驚いた事に、彼女は以前とは異なる勤め先に就いたのだ。

何故？

そう考えて、ふと気付いた。

もしかして、彼女も同じ体験をしているんじゃないだろうか。

だとしたら、彼女が先の体験で学習して、それを回避しようとしたんじゃないか。

知っていて、同じ事を繰り返そうとする方が変だ。

だけど、そうなると俺は困る。

それじゃ彼女を救えないし、守れないじゃないか。

どうしよう、と考えて、俺は彼女を陰から観察し、何か困った事があればいつでもサポートしようと考えた。

工藤にはできない。俺にしかできない。

彼女と同じ体験をした俺にしか理解できない事がある。

正面から、あなたは一度死んだ経験があるだろう、等と聞く事はできなかった。

それでは頭がおかしい人間だと思われかねない。

それは困る。

俺は彼女を愛している。

彼女の死は、俺の心の一部の喪失だ。

だから守りたい。

所詮、自分以外の人間は全て他人だ。

関わろうとしなければ、繋がりもない。

こちらが関わろうとしても、相手に拒否されればそれまでだ。
彼女は俺を知らないという。

俺は彼女を知っている。

彼女はとても目立つ存在だった。

何処にいても、すぐに彼女を見つけ出す事ができた。

考えてみれば、俺は彼女の観察者だった。

四六時中彼女を観察していたわけではなかった。

だけどいつも自然と彼女を目で追っていたから、頭で考える事なく、彼女の次の行動、ある程度の思考や発想が、推測できた。

俺は、彼女の唯一無二の理解者になれる。

俺ほど彼女を見てきた人間はいない。

だけど俺は同時に、彼女の拒絶を恐れていた。

彼女に傷付けられる事が恐かった。

俺は先の体験で、ひどく臆病になっていた。

彼女に知らないと言われたらどうしよう。

記憶にないと言われたら？

アピールが必要だ。

だけど積極的な行動は怖い。

彼女に必要とされなくてはならない。

彼女にとって必要な人間になろう。

そうしたら、俺のことは見てくれるかもしれない。

俺に気付いてくれるかもしれない。

俺の言葉に耳を傾けてくれるかもしれない。

俺は彼女を愛している。

だけど彼女に愛されたいなどと大それた事は考えていない。

どうせ告白しても、相手にしてくれない。

俺を意識してはくれない。

俺はその他大勢の群衆の一人、あるいはオブジェの一つ。

それは良い。

悲しいけれど甘受しよう。

彼女は俺を見ていない。

視界の中にも気付かない。

挨拶すると微笑んではくれるけど、個として認識してはくれない。
俺は彼女から目をそらせない。

だけど彼女の眼中にはない。

悔しさはある。

悲しいと思う。

痛くて苦しい。

だけど忘れられない。

忘れたつもりになっても思い出す。

苦しい。

だけど、目をそらせないなら、忘れられないなら、諦めよう。

俺は自分の心を殺して、観察者になる。

報われない傍観者ではなく、彼女を庇護する観察者に。

だけど俺は忘れていた。

自分が無力で臆病な人間だということを。

安っぽいヒロイズムに溺れ、ナルシスティックな幻想に酔ってみ

ても、人間の本质は変わらない。

俺は無力だったのだ。

身がすくんで動けない。

なんのために彼女を観察してきたというのだろう。

俺は弱虫で臆病だ。

荒事は得意じゃない。

ガタガタと震えていた。

逃げる事も、助けを呼ぶ事も、目をそらし耳を塞ぐ事もできずに、

ただ目の前で行われている事を凝視し続ける。

目の前で、彼女が男に殴られているのに、俺は何もできない。

ああ、だけど。

彼女の悲鳴は、なんて甘美で美しいんだ。

彼女の泣き顔は、いとけない幼女のような愛らしさ、汚れなさ、

か弱さと同時に、女の色香を漂わせている。

殴られ、殴られ、傷付いている姿にさえ、陶然とする。

可哀想だと思う。

悲しいと思う。

彼女に触れているのが俺ではなく、工藤ですらなく、行きずりの見ず知らずの男だという事が悔しくもある。

だけどそれは、俺が夢想した行為だった。

俺が夢の中で、幾度となく繰り返した行為だった。

彼女は震え、脅え、泣き、わななきながら、呼吸を荒げ、むせぶ。いや、と嘆くその声すら男を煽るという事を彼女は自覚しているのだろうか。

夜陰に浮かぶ白い肌は煽情的で、あえぐ吐息や悲鳴が悩ましい。気付くと勃起していた。

興奮していた。

食い入るように、彼女を見つめた。

そして、俺は射精した。

その瞬間、ようやく我に返った。

彼女は泣いていた。

強気な彼女が、童女のように泣いていた。

男は事が終わると、彼女を脅しつけた上で立ち去った。

俺は見ているだけだった。

自分の罪深さに気付いたのは、月明かりに照らされた、彼女の泣き濡れ、傷だらけの顔を見た時だった。

化粧はすっかり崩れてしまい、髪は乱れ切っている。

唇や額、鼻から血が流れ、頬は腫れ上がり、顔の輪郭は変形していた。

俺は黙って見つめる事しかできなかった。

泣いていた彼女は、それでも一人で立ち上がった。

彼女は誰にも助けを求めなかった。

ふらつき、よろめき、右足を引きずり、とても辛そうなのに、自

力で帰宅した。

俺は震えていた。

最初から最後まで無言で見つめていた。

彼女の部屋を見つめていた。

朝まで見ていたが、彼女は誰も呼ばなかったらしい。

翌日、彼女は外出せずに、閉じ籠っていた。

だけど、その翌日には、普通の顔で現れた。

しかし、良く見れば、青痣や傷がうっすら見えていた。

彼女の顔は強張っていた。

だけど彼女は唇を引き締め、何かを睨み付けるかのような表情で足早に歩き、出勤した。

さすがに一週間は、デートをしなかった。

だけど、一週間後の週末、彼女は工藤と食事をし、工藤の部屋に泊まった。

翌朝、何も知らずににやついている工藤の顔を見た時、不意に怒りが沸いた。

だから俺は、工藤の郵便受けに、道端に落ちていたゴミを入れてやった。

俺は彼女の秘密を知っているぞ、と教えてやりたかったが、我慢した。

それは俺と彼女の秘密だった。

それにもし彼女に、俺が黙って見ていた事がバレたら嫌われてしまうじゃないか。

それは困る。

嫌われたくはない。

軽蔑されたくはない。

俺は、とても悲しく、淋しくなった。

俺は彼女を守りたいのに、彼女の救いになりたいのに、遠くから見ている事しかできない。

ごめん。

ごめんなさい。

本当にごめん。

君は笑っているけど、本当は笑っていないと、俺は知っている。
工藤は間近で彼女を見ても、彼女の傷に、陰に、まるで気付かない。
い。

本当に役に立たない神経の鈍い男だ。

彼女にはふさわしくない。

彼女のことを、まるで理解していないくせに。

自分勝手に我儘で能天気なお調子者。

ムカつく。

……何も知らないくせに。

教えてやりたい。

だけど教えたくない。

誰かに話したい。

だけど話せる筈がない。

彼女に話しかけてみようか。

そんな事はできない。

悶々とする。

だけど伝えてみたい気がする。

そして彼女の反応が見てみたい。

手紙を書いてみようか。

自筆だとバレるかもしれないから、ワープロで。

俺は君の秘密を知っている。

だから君は、一人で泣いたり苦しまなくて良い。

僕は君の辛さ、苦しみを知っている。

君は無理をしなくて良いんだ。

君を助けられなくてごめん。

俺は弱虫だ。

君を守れなかった。

本当にごめん。

だけど君は一人じゃない。

僕が君のそばにいる。

書いた後で、手紙を破り捨てた。

言葉にすると、なんだか陳腐だ。

これじゃ駄目だ。

もっと考えよう。

こんなのじゃ駄目なんだ。

ふと。

胸の辺りで、何かチリチリするものを感じた。

第四話 悔恨

胸が時折チリチリと痛み、うずく。

何故かは判らない。

俺は彼女を観察する。

彼女には、一定以上の距離は近付かない。

黙って見守る。

彼女の形が、心の動きが、少しずつ見えてくる。

例えば、困った時は前髪を掻き上げる癖がある。

可愛いもの、綺麗なもの、お気に入りものを見つけると、目を細める。

考え事をする時は、遠くを見つめる。

妙なものが苦手だ。

例えばセミ。

抜け殻や死骸でさえ苦手らしく、見つけた瞬間硬直して、それから大袈裟なくらいゆっくり大回りする。

まるで食い付かれるのを恐れているかのように。

服の好みなんかも判ってきた。

お嬢様っぽい派手なスカートやワンピース。

それにわざとカチツとしたジャケットやコートを合わせてみる。

靴は華奢なものからゴツゴツしたものまで、その都度合わせて履き変える。

エレガントに、だけどシックに、スタイリッシュに、ほんのり甘くビターにピシッと決める。

でもデートの時は、いつもより丈が短めのスカートをはいてみたり、ふわっとした甘い雰囲気にとめてみたり、胸元を強調するような服を着てみたりする。

上品さを失わない。

だけどほんのりエロティック。

化粧の仕方もそうだ。

薄めの唇を気にして、わざと大きめに塗って、グロスで仕上げる。眉は少しきつめに、アイラインは丁寧に。

コートなしでスーツを着ると、腰のラインがひどく魅力的だ。すんなりした細腰に、ツンと上を向いた形の良いヒップ。

そこから伸びる美しい足。

くるぶしは片手で掴めそうだ。

妄想の中で、彼女のくるぶしを掴んで、足の指一本ずつに口付け、舌で舐め回し、口に含んで吸う様を思い描く。

彼女は女王のように君臨し、冷めた目つきで俺を見下ろす。

そのくるぶしに、ふくらはぎに、膝裏に、太腿に口付けて、見えそうで見えないスカートの奥の深淵に、切望と嘆願と憧憬の吐息を洩らす。

お預けをくらったまま、よだれを垂らしてエサを待つ犬のように、息を荒げながら、じっと待つ。

彼女は俺に何も与えない。

視線も言葉もくれはしない。

俺は焦れ、悶えながら、この状況に快楽を覚え始めている。

彼女は美しい。

眺めているだけで陶然とする。

だが、あれから数週間後、彼女の様子がおかしくなってきた。

最初は理由が判らなかった。

彼女はある日、産婦人科に診察に行き、真っ青な顔で出てきた。

それでも俺は理解できなかった。

彼女は何故か工藤に別れ話をした。

その帰り道に、車ではねられた。

車はそのまま走り去った。

周囲に人はいなかった。

俺は慌てて彼女に駆け寄った。

彼女はまだ生きていた。

「大丈夫か!？」 永池!! 今すぐに救急車と警察を呼ぶから……」

「……だ……れ……?」

虚ろな目、かすれて消え入りそうな囁き声。

「広沢だよ。高校時代、野球部の」

俺は彼女を安心させようと微笑んだ。

「……誰……?」

うわ言のように呟いた。

その瞬間に、頭の中が真っ白になる。

「……ダメ」

永池真理は囁くように言った。

「知られ……たくない……誰にも」

「な、永池……?」

焦点が合っていないかった。

「お腹の子のこと、知られたくない……ダメ……」

……ああ。

まさか。

まさか、そういう事なのか?

「誰にも知られたくない……」

呟く彼女を抱き上げた。

頭から血を流していた。

彼女の目は何も見ていなかった。

彼女の耳は何も聞いていなかった。

脈拍は低く、体温は低く、呼吸は途切れそうだった。

俺は彼女を自分の車の助手席に乗せた。

病院に辿り着く前に、彼女は事切れた。

その間、彼女は呟き続けていた。

「ごめ、んなさい、ごめん、なさい、ご、めんなさい。殺そうとして、ごめんな、さい。こ、の世から消そうとして、ご、めんなさい。私、が悪い、の。迂濶、で不注意、でごめんなさい、ごめんなさい、

「ごめんなさい……直哉……」

もう良い。謝らなくて良い。

何度言っても、彼女には伝わらなかった。

繰り返し何度も同じ言葉を呟き続ける。

気が狂いそうだった。

「いや、触らない、で……助、けて、助けて、助け、て……っ」

耳を塞ぎたくても塞げなかった。

懇願と悔恨、救いを求める声。

それは力なく苦しげにかすれて切羽詰まっていて、そのくせ、やけに甘美に聞こえた。

「永……池……っ！」

彼女が最期の吐息を洩らし、車内が静寂に満たされた時、ほっとすると同時に、喉元に競り上がってくる何かを感じた。

両目からは涙をこぼしていた。

「永池……っ」

彼女がピクリともしなくなって数分後、ようやく車を路肩に停めて、恐る恐る触れた。

呼吸をしていなかった。

脈拍がなかった。

まだ身体は温かった。

だけど徐々に冷えつつあった。

やはり救急車と警察を呼ぶべきだっただろうかと思った。

だが、既に遅い。手遅れだ。

「……ごめん……っ」

俺は泣いた。号泣した。冷たく硬くなっていく彼女を抱きしめて泣いた。

それから、彼女を病院に連れて行く代わりに、ドライブに連れて行った。

無論、彼女は反応しない。

判っていて連れ回した。

車を停めたり、降りたりしなかった。

そんなことをすれば、嫌でも現実を直視する羽目になる。

現実逃避。

返事をしない彼女に話しかけながら、走った。

「ここはね、俺の祖母の家の近くなんだ。君は知らないだろうけど、茸がたくさん採れる山で……」

沈黙が恐かった。

現実を直視するのが恐かった。

だけど、腹は減るし、ガソリンも減る。

とりあえず家に帰った。

どうしようかと少し悩んだが、彼女を自分の部屋に運んだ。

電灯の下で見た彼女の顔は青かった。

俺は彼女の瞳を閉じてやり、頭や顔に付着した血をタオルで拭い取ってきれいにした。

彼女の所持品を持って来なかった事に、今更気付いた。

心身共に疲れていた。

俺は彼女をベッドに寝かせ、自分はソファで眠り込んだ。

そして翌日、新聞を見て仰天した。

彼女が何らかの事故あるいは事件に巻き込まれ、怪我をして連れ去られたと報じられていた。

付近で目撃された不審車両は複数台。

その内の一台は俺だった。

また、不審車のものと思われる塗料や、プラスチック片も採取され、現在該当車両を絞り込み中とあった。

しまった、と今更ながら気付く。

俺が彼女を撥ねたわけではない事はすぐに調べがつく筈だ。

だけど、俺が彼女を現場から連れ去ってしまった事は事実だ。

事故を隠蔽するためでも、彼女に危害を加えようとしたわけでも、何か奪ったり利用しようとしたわけでもない。

だが、数日前から目撃されたという不審車、不審人物は、明らか

に俺だった。

しかも、車の助手席には、彼女の血痕が残っている。
血の気が引いた。絶体絶命だ。

誰に、何と釈明すれば、俺の無実を信じて貰えるだろう。

慌ててテレビ、インターネットを確認した。

速報が出ていた。

轢き逃げ犯は今朝の早朝、自主していた。

警察は引き続き、彼女をさらった人物と車の特定を急いでいるという。

テレビのコメンテーターが、しかめつらしい顔で、

「現場の状況からすると、彼女はもう生存していない可能性がある
ますね」

等と他人事のように言う。

モザイクなどをかけられていたが、彼女のアパートや実家、事故
現場、それに号泣する工藤や、「犯人はすぐに捕まって欲しいです」
などと言う永池の友人などが映された。

目の前が暗くなるのを感じた。

「違う。俺は、犯人なんかじゃない……」

呆然と呟いた。

だって俺は、何も悪い事をしていない。

悪いのは、彼女を轢き逃げした男、それとレイプした男だ。

何もしなかった、何も気付かなかった、彼女を守れなかった工藤
にだって問題がある。

そう考えて、ギクリとした。

じゃあ、俺は何だ？

俺は彼女に何ができた？

俺は彼女に何もしなかった。

俺は彼女を守れなかった。

俺は彼女に何もできなかった。

俺は泣いた。号泣した。

押し寄せてきた後悔は、悔恨は、とてつもなかった。

そうだ。俺は彼女に何もしていない。

知っていたのに、気付いていたのに。

果たして誰が、俺を許してくれる？

無実だと訴えて、それが認められたとしても、誰が俺を認めてくれる？

正当性など一つもない。

人にたたえられることなど一つもしていない。

俺は破滅だ。

何もない。

どうしようもない。

弁明が、釈明が、いったい何の役に立つ？

誰の、何の役にも立たないなら、どうせ汚名を、汚濁を被るなら、この際、せめて死ぬ気の覚悟をしろ。

信頼はもう諦めよう。

どう釈明しても失墜する。

職は失うだろう。

友人は、こんな時に頼りになるような友人はいない。

覚悟と心構え。

スッパリ決める。

思い切れ。

どうせ犯罪者にされるなら、一つだけやっておきたい事がある。

俺はレイプ犯の顔を見た。

おそらくヤツは、今もあの近辺で犯行に及んでいるだろう。

俺は服を着替え、帽子を被り、サングラスをかけた。

マスクまですると怪しすぎる。

昔、春臣さんがくれた外国製のサバイバルナイフを探した。

それをカーゴパンツのポケットに入れた。

革製の手袋をはめ、ブーツを履いた。

携帯は持たずに、財布と鍵だけを持って外に出た。

そして、車を港へと走らせ、適当な駐車場に停める。

車の鍵は海に放り投げた。

それから、彼女の勤め先近辺——彼女がレイプされた公園へと向かった。

第五話 月光（前書き）

グロテスクで残酷な暴力描写があります。
苦手な方はご注意ください。

第五話 月光

春臣さんが、ナイフをくれたのは、中学二年の夏休みだ。

「英語で生命はLife、生活もLifeだ。生活するってのは、生命活動を維持することだからな！」

春臣さんは嬉しそうに言った。

「隆史、お前は優しく真面目だが生命力が足りない。だから今日から三日間、この我が家の裏山で生きるという事について考えてみようぜ。まずは自力で食料を探して調達しろ。道具はこれだ」

そう言って渡されたのが、サバイバルナイフだった。

使い方が判らないと言うと、邪魔な植物や小枝の切り払い方、木の削り方、木の実の取り方等を教えてくれた。

「なんでそんなこと知ってるの？」

「ここは俺の家の庭みたいなものだからな。ガキの頃から探険しつつして知らない事などない。俺は水さえあれば一週間くらいはこの裏山で暮らせるぜ。野ウサギなんかもいるしな。まだ食べた事はないけど。削った木の枝は投げるんだ。上手くやれば蛇なんかを捕まえられる」

「蛇なんか捕まえてどうするんだよ」

「もちろん食べる。結構うまいぞ」

思わず想像してしまった。

「ナイフは見たら判ると思うが片刃だ。だから、使う時は刃の向きと角度に気を付けて使えよ。下手な使い方だと、切れない上に刃を悪くしかねないからな。あと刃物全般に言える事だが、力任せに振り回すな。上手く切れない時は大抵刃の向きか角度か動かし方が悪い。習うより慣れる。身体で覚えろ。いつかきつと役に立つ」

春臣さんの教えはいつも役に立つのか、立たないのか微妙だ。

少なくとも日常に、サバイバルナイフ一本で生活しなくてはならない状況などない。

だが、教えてくれた事によって包丁や小刀、のこぎり等の使い方が上達した気がする。

鉛筆をナイフやカッター等で削れるようになった。
だけど、鉛筆はほとんど使わない。

犯人は一日や二日では見つからないだろうと覚悟していた。

闇雲に捜しても無駄だ。

それよりは、狙われそうな女性の目星を付けて、後をつけよう。
俺には、レイプ犯の気持ちなど理解できなかった。
全く判らないわけではないと思う。

だが、ヤツが果たして女を選び好みするものなのか、とにかく女で狙いやすければ誰でも良いのか、そういう趣味嗜好及び思考等が判らなかった。

とりあえず、一晩目は、永池真理に似たタイプの女がいなかちエックしてみよう。

男が永池を襲った時間の前後一時間を張る事にする。

河岸や時間帯を変えていたら、お手上げだ。

夜の闇に潜むために選んだ服は、明るい場所には不似合いだ。

職務質問だけは、受けたくない。

とりあえずネットカフェで情報がないか検索する。

さすがに、レイプ犯の出没ポイント情報なんてものは見つからない。
い。

ニュースをチェックしてみた。

まだ車も永池も見つかっていない。

昼近かったので、昼食と仮眠を取った。

四時近くまで時間を潰して、店を出た。

コンビニでペットボトルとゼリー飲料と眠気覚ましのガムを買った。
それから公園に向かった。

公園をゆっくり歩いて、経路や状況等を確認する。
それから、人目がない時を見計らって、身を潜めた。

二日、空振りだった。

だけど三日目、車が見つかった日の夜、ようやくそれらしき男に遭遇した。

男は狙った女をこっそりつけて、隙を見て襲いかかる。

口を塞がれ、幾度か殴り、刃物を突き付け「騒ぐと殺すぞ」と脅す。

俺はその様子を息をひそめて無言で見つめた。

男は俺より若干体格が良い。

男は最初は辺りを警戒していたが、その内女に集中し出した。

俺はポケットからナイフを取り出し、鞘から抜いた。

全長二十三センチ、柄には滑り止めの革が巻かれている。

美しさより実用性を重視したデザイン。

軽量だ。

俺は柄を握って静かに深呼吸する。

月の光が静かに照らし、優しく包み込んでくれる。

永池真理の事を思い浮かべる。

……真理。

初めて彼女を名前で呼ぶ。

なんとなく嬉しい気分で、微笑んだ。

冷たい静かなものが全身を満たしていく。

柄を握り直し、刃の向きを確認した。

そして覚悟を決めて振り上げる。

一番柔らかそうな下腹部、脇腹を狙った。

首や頭部は、不意打ちが成功すれば良いが、避けられやすい。

初撃は背中から脇腹をえぐった。

男が悲鳴を上げて振り返った。俺を見つけると、声を荒げる。

「なんだ、貴様あつ！」

一瞬ビクリとしたが、更に腕を振るった。伸ばされかけた男の右腕を切り裂いた。

男は悲鳴を上げて、ナイフを落とした。

俺は無我夢中で切り付けた。反撃の隙を与えなくなかった。

腕と言わず、顔と言わず、腹と言わず、足と言わず、刺しまくった。

途中で女が悲鳴を上げた。

ゾクリとした。

絹を裂くような声。

月光。

鮮やかな赤い血。

生臭い鉄の臭い。

飛沫が顔にかかり、雫となって、ゆっくり伝い落ちる。

刺している内に洗惚としてくる。

赤く流れる血が、パッキリ割れた赤い肉や内臓が、その時不意に、汚らしい醜いものから、美しいものに見えてきた。

グラリと幻惑されて吐息をつく。

男は苦悶にあえいでいる。

女は恐怖に悲鳴を上げる。

俺はこれまで、男にも女にも軽んじられ、無視される事が多かった。

それが今、注目を浴びている。

二人の視線は、俺だけに注がれている。

喜びを覚えた。

もつと俺を見てくれ。

俺を見つめてくれ。

優しい言葉なんていらぬ。

抱擁もいらぬ。

熱い視線を注ぎ浴びせてくれ。

刺している内に、昔習ったナイフの遣い方を思い出す。

ああ、ちゃんと覚えてる。

力任せに振るうのではなく、力を抜いて、刃の角度に気を付けて、腕のスナップを効かせて、効果的に。

だんだん慣れてきた気がする。

男はほとんど動かなくなってきた。

俺は微笑む。

俺は勝った。

初めて人に勝った。

男は抵抗しない。

反応が鈍くなってきた。

「あ……ああ、いや。怖い、化物……っ、やだっ……気持ち悪い」

……気持ち悪い？

俺は男を刺すのをやめて、女を見た。

女はガタガタ震えていた。

恐怖と嫌悪をあらわにして、俺を凝視している。

「化物？」

「……や、やめて、近寄らないでっ……いや……！」

血に濡れた俺を、ナイフを見つめて、女が悲鳴を上げる。

「誰が化物？」

「いやあああああっ！！」

女が絶叫する。

フツツと何かが切れた。

俺は腕を閃かせ、女の喉を切り裂いた。

絶叫は途絶え、血が溢れ濡らす。

俺はその血に口を付けた。

一口すすする。

「……不味い」

吐き出した。

ひどく静かだった。

冷たくて寒い。

血は温かい。

まだ息のある女の肌は温かい。
だけど寒い。

「……寒いよ」

既に高揚も恍惚も興奮もない。

汗ばんだ肌が、風を感じて、ブルリと震える。

「助けて」

俺は呟く。

男の顔を見下ろす。

そう確かにこいつだ、間違いない。

「真理」

今更ながら後悔している。

「俺を助けて」

誰も俺を助けてくれない。

俺はフラフラと立ち上がる。

身体がひどく重かった。

化物。

気持ち悪い。

「……気持ち悪い？」

身体が震えた。

「俺が？」

人の気配を感じた。

誰かがこちらにやって来る。

ギクリと硬直した。

現れたのは、女性だった。

「きゃあああああっ!!」

ああ。

……そうか。

俺は、人が見て嫌悪を感じるものに、汚らわしいものになってし

まっただ。

一目見て悲鳴を上げられる程に。
化物に。

ああ、狂えるものなら狂ってしまいたい。
痛くて寒い。

辛い。

苦しい。

正気を失って楽になりたい。
でなければ死のう。

死にたい。

消えたい。

悲しい。

無力な自分が嫌いだ。

何もできない自分が嫌いだ。

役に立たない自分が嫌いだ。

涙が溢れた。

俺はナイフを頸動脈に当てる。

そんな事はやった事がない。

だけど心臓を突こうとするよりは、成功率は高い筈だ。
俺は深呼吸して、刃を引いた。

第六話 死後の世界

気付くと涙を流していた。

雲一つない美しい青い空がひどく眩しい。

どうしようもなく哀しくて、苦しくて、呆然と立ち尽くす。

通りすがりの人が俺を見てギクリとしたように目をそらして、足早に立ち去る。

助けて。

俺は孤独だ。

淋しい。

哀しい。

苦しい。

だけど判っている。

誰も俺を救ってくれない。

誰も俺を助けてくれない。

幼い子供の頃なら泣いていたら、優しい大人に助けて貰えたかもしれない。

けれど、成人したらそうはいかない。

誰も俺を守ってくれない。

……誰も愛してくれない。

泣いた。

ひたすら泣いた。

ただ泣いた。

その内、何故泣いているのか自分でも良く判らなくなってきたけど、とにかく泣いた。

日にち、時間感覚がおかしい。

今、自分が何処にいて、何をしているのか判らない。

帰ろうにも、自分の家の方角すら判らない。

情けなくて、哀しくて、淋しくて、辛くて苦しくて。

夢と現実の区別すらつかない混沌と混乱の中で、俺は迷子の子供のように泣きじゃくった。

実際、俺は迷子だった。

自分が何処へ行けば良いのか判らない。

「……誰か助けて」

自分が何をしたいのかも判らない。

「助けて」

声はかすれる。

視界は歪む。

俺は、狂っているのか？

頭がおかしくなっているのか？

腹が、呑気にぐうと鳴った。

こんな時でも腹は減るらしい。

俺は辺りを見回した。

とりあえず食事をしよう。

それから、これからのことを考えよう。

胸ポケットを探ると財布があった。

中には千円札が二枚と一万円札が三枚。

キャッシュカードは見当たらないが、とりあえずは問題ない。

車の鍵も入っていた。だけど何処に停めてあるかが判らない。

相変わらず現在地は不明だ。

赤の他人に「実は記憶喪失で何も判らないんです」と言ったら、

どんな顔されるだろう。

たぶん狂人扱いされるか、憐れまれるか、胡散臭いと思われるかだ。

少なくとも同じ目線で考えてくれるお人好しいないだろう。

携帯電話が鳴り響いた。

画面を覗き込んだ。

涙が邪魔だ。

ごしごしと拭い、鼻をすすり上げながら、通話ボタンを押す。

『おう、俺、俺』

身体力がふっと抜けた。

「……春臣さん」

明るい声が耳元で響く。

『あのな、近所の人にボタン肉貰ったんだ。一緒に食わないか？』

この人は本当に、いつまでも変わらない。苦笑した。

「ボタン肉ってイノシシ？」

『おうよ。精力つくぜ。クマの方が精力つくけど、クマは脂多くて一度にたくさん食うと、腹を壊す事もあるからな。ボタン肉は脂っこくないし、クセもなくってヘルシーだ。猟師さん秘伝のタレに浸けてあって臭みもない。とれたてだから、まだかろうじて生でも食えるってよ』

「……さすがに生は無理だよ」

ヘビやカエルと同じくらいダメだと思う。

少なくとも俺は無理だ。食べられない。

『ところで今、何をしてる？』

突差に答えられなかった。

俺は自分が何をしていたのか、何をしようとしていたのか判らない。

『昼休みに昼飯食うところだったか？』

昼休み。という事は、大学か会社か。

俺は、自分の職業はもちろん自宅の場所すら知らない。

「……迷子」

ポツリと言ったら吹き出された。

『判った。今すぐ迎えに行行ってやるから、目印言えよ』

言われるままに答えた。

『なんだ。だったら、お前、勤め先の近所じゃん。バツカだな』

そう言いながらも、春臣さんは言う。

『すぐ迎えに行くから、ちょっと待ってろ』

そう言ってくれた。

『お前は本当にいつまで経ってもガキの頃と変わらないな』

そんなはずはない。

少なくとも、あれが、あの殺人が、自殺が夢でも、精神上は汚れた殺人者・犯罪者だ。

俺は既に血で汚れている。

だってあれは、あまりにもリアル過ぎた。

俺はリアルな血に、殺戮に酔い知れた。

俺は、血に、殺人に、快楽を感じる狂人なのか？

月は見えない。

血痕もない。

生々しい血の臭いと温かさを思い出す。

それだけなのに、ひどく興奮した。

嫌悪と同時に、快楽、憧憬を覚えた。

俺は変態だ。

誰にも認めて貰えない。

誰にも許して貰えない。

誰でも良いから人を殺してみたい。

そんな欲求抱くのは狂人だ。

変態だ。

俺は、変態だったのか。

俺は狂人なのか。

判らない。

全く判らない。

俺は頭がおかしいのか。

職場近くで迷子になって、しかも記憶が混乱している。

自分の居場所も、心の中も、理解できない。

「よ、どした。辛気臭い顔して。女にでもフラレたか？」

俺は苦笑した。

春臣さんは屈託ない。

こんな根暗でつまらない俺に積極的に話しかけて、可愛がってく

れる。

「春臣さんは、俺が甥だから面倒見てくれるの？」

「あ、うん？ いや、俺は基本的に自由人というか、風来坊だからな。たぶん一生結婚しねーし、できねーし、お前が息子みたいな気分なんだ」

「なんで落ち着かないの？」

「そうしようと思えば、いくらでも可能はずだ。」

「いや、俺は一回死んでるんだよな」

「え？」

ドキリとした。

「いや、それは物の例えなんだけど、俺は一回精神的に死んでるんだよ。だから今は、死後の世界なんだな。そう思ってるから、俺は積極的に、世界や世間に関わりたくないんだ。だって俺は幽霊だからな。幽霊がなんでもしゃばって、生者の邪魔しちやいかんだろ。そう思って、俺は世の中を斜め45度の角度から見事にしてんの」
そう言って春臣さんは苦笑した。

「ま、アホだろ。けど、掛け値なしの本音。お前だから話したんだ。誰にも言うなよ。特に姉貴には」

頼む、と片手拝みされて頷く。

「うん」

死後の世界。

それは、なんとなく判るような気がした。

だけど、春臣さんに共感できるかといわれれば、また別だ。

「なんで自分が死んでるとか、幽霊だとか思うの？」

その方が気になる。

春臣さんは、悩みなんかなさそうだし、鬱屈とは縁のない、自由な生き方してるみたいに見えるのに。

「俺は、人間が生きていくのに一番重要な何かが足りないんだな。十代の時は、それから目をそらして生きようとしたけど、ある日ふと悟ったんだ」

「何を？」

春臣さんは真顔になった。

「俺は、誰も愛せないんだ」

「……え？」

ぽかん、とした。

「そんなはずはないと思ってたんだが、違うと気付いた。俺は他人を憐れに思わないし、感情移入しない。映画を見ても感動しない。もしかしたらサイコパスってやつかも知れないな」

「違う！」

俺は否定した。

「絶対に違う！」

だって俺は、春臣さんを良く知っている。
もう一人の家族のように思ってきた。

春臣さんは優しい。

俺を可愛がり、色々面倒見てくれた。

春臣さんの愛情を常に感じていた。

春臣さんは、俺の道標。

真っ暗な闇に浮かぶ小さな灯火。

「……違うよ。そんなに哀しいこと言わないでよ」

そうじゃなきゃ、救われないじゃないか。

俺も、春臣さんも。

「……そうだな」

春臣さんはポツリと言った。

「つまらない事言ったな。すまん、許してくれ。単なる愚痴だ」

「愚痴？」

「つい先週、女にフラれたからな。ま、忘れてくれ」

春臣さんはそう言って淋しげに笑った。

第六話 死後の世界（後書き）

相変わらず暗くて後ろ向きです。

一応最終話は書いてるんですが、その間の話が書いてないので、時間かかりそうです。

内容が内容なので読んでくださる方もごく少数ですが、展開遅くてすみません。

一応次話あたりから、テンポ変わっていく予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9934b/>

愚者のダンス

2011年9月2日19時52分発行